

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
共同プロジェクト研究  
2023年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名					
	文学部・教授		河野 哲也					
研究課題	アートパフォーマンスの間身体性現象学							
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2024年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名					
	中京大学・国際学部・教授		長滝 祥司					
	東海大学・文化社会学部・教授		田中 彰吾					
	武蔵野美術大学・造形学部・教授		杉浦 幸子					
	本学現代心理学部・教授		白井 述					
	東京交通短期大学・運輸科・専任講師		佐古 仁志					
本学文学研究科・教育学専攻・博士課程後期課程		日向 悠太						
全研究期間	2022年度		～	2023年度				
研究経費※ (上段:支出金額)	2022年度		2023年度		年度		総計	
	2,825,418	円	2,670,669	円	0,000,000	円	5,496,087	円
(下段:採択金額)	3,000,000	円	3,000,000	円	0,000,000	円	6,000,000	円

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、哲学、認知科学、心理学、美学等の分野を相互に参照しながら、人間が、アートパフォーマンスにおいて、どのように現実界と想像界の往還を経験するのか、どのように自分の身体的存在の更新を経験するのか、パフォーマー自身と観客の当事者の視点から、その身体経験を現象学的・質的に明らかにすることを目的とする。

23年度は、大型の外部資金研究費を獲得すべく、本研究全体の枠組みを論じなおしながら、研究分担者それぞれが、新しい展開を見出すべく研究を推進した。河野、杉浦、佐古は、コミュニケーションを全身体的交流として理解し、その実践をアートや自然経験、あるいは臨床的方法についての対話の中に見出す研究を行った。田中、白井は心理学の立場から間身体性の実証実験を踏まえた研究を行なった。河野、長滝、日向は、対人スポーツ(武道含む)における間身体的交流を、スポーツ学、心理学、教育学の知見を踏まえて、データを集めながら現象学的方法論の発展を試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[間身体性] [アート・パフォーマンス] [現象学]

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

今年度は、二年間の研究のまとめとして、学会での共同発表やシンポジウムの成果を共有しながら、大型科研費などの外部資金への申請を行なった。残念ながら、河野が代表者として申請した難関の大型科研費（特別推進、基盤（S）、基盤（A））は採択には至らなかったが、河野は、本 SFR と関連したテーマにおいて、学術知共創プログラム「< 課題 B > 「分断社会の超克」「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」（代表：床呂郁哉（東京外国語大学））の分担者として採択され、田中は、同じく本 SFR に関連するテーマで、FY2023CREST の multi-sensing biosystems and development of adaptive technologies 分野において、Narrative embodiment: neurocognitive mechanisms and its application to VR intervention techniques の分担者として採択され、河野も研究協力者として参画している。研究者間では学会での共同発表・シンポジウムを行い連携は緊密であり、今後につながる一定の成果を上げることができたといえるだろう。

代表者の**河野**は、第一に、教育活動における対話を、スキルを伴った身体的パフォーマンスとして理解する立場をとり、教育実践を映像・音声を記録して、それを独自開発したアプリケーションで分析する作業を行なった。記録は、江戸川区のこども未来館での実践、各地美術館での鑑賞型対話、「総合的な学習の時間」と関連させた沖縄での複数の小中学校での実践を記録してデータとして利用した。以下の業績には書き切れなかったが、多数の招待公演を行なった（神奈川県高校教育会館主催招待公演など）。第二に、間身体性についての生態学的現象学の立場からの理論的考察に関しては、田中と共著を出版し、国際学会や国際シンポジウム（国際技術哲学会、人間科学研究国際学会、ユネスコ CIPSH 国際会議）にも多数参加して、関連する発表を行なった。同様に、武道や芸道のパフォーマンス現象学に関しては、複数の英語とフランス語での出版を行なった。

分担者の**長滝**は、近年、認知科学において、身体やパフォーマンス、また身体性を軸とした社会関係の研究が新しい展開を見せつつある。そこには、身体を機械として捉え、技能を数量的に把握し反復できるものとして理解していこうとする自然科学的研究方向（認知科学 A）と、そうした方法では捉えきれない身体技能やパフォーマンスのもつ質的側面や一回的側面にフォーカスする研究方向（認知科学 B）とのせめぎ合いがある。（認知科学 A）とは、近代科学の従来の手法を踏襲し、主として統制された実験室内やコンピュータ・シミュレーションによって得られたデータなどを客観的に分析するものである。（認知科学 B）とは、暗黙知的な身体技能、社会的状況や文脈、文化、他者関係など、より具体的な現象を研究対象とするものである。①認知科学 B の理論的背景を明らかにし、その具体的実践としてサッカーの技能と指導言語を題材にして研究を進めた。また②認知科学 A と認知科学 B を相反するものにとらえるのではなく、両者を架橋する理論的な研究を行った。認知科学 B が対象とするような質的研究と従来の数量的で再現可能とされる認知科学 A の研究をどのように調停するかについて、感情という社会関係を形成する心的状態の存在論的身分の解明もふくめて、一定の見通しを提示した。

**田中**は、メルロ＝ポンティの知覚論と身体図式論を手がかりとして、障害学の分野で議論を拡張する研究を行った。2023 年度 8 月には、第 40 回人間科学研究国際学会（IH SRC）を本務校東海大学に招致し、実行委員長として主催した。8 月にパラスポーツを題材とする講演をパラリンピック研究会で行い、障害スポーツを実践することと観戦することの意義について間身体性の観点から論じ、パラリンピック委員会長の河合純一氏と議論を深めた。また、12 月には東海大学ティーチングクオリフィケーションセンター主催のシンポジウムで、触覚的経験から視覚障害の当事者経験について考察する講演を行い、視覚障害当事者で文化人類学者の広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館）、同じく視覚障害者で元教師の栗川治氏（立教大学）と議論した。二つの議論で確認されたのは、運動感覚に裏打ちされた身体行為を起点として感覚経験を理解し直すことが重要であるというエナクティビズムの観点である。これら二つの議論をもとに、自己の身体と他者の身体の間で、相互行為を通じて互いの感覚・知覚経験についての理解が深まり、モダリティに応じた間身体性の展開がありうるということが示唆された。特定の感覚モダリティに固有の間身体性の展開を見極めることが今後の研究の焦点になると考えている。

**研究【経過・成果】の概要** (つづき)

杉浦は、「アート作品鑑賞パフォーマンスの心身論的解」を目的として、2022～2023年度、以下の執筆、講演会、鑑賞プログラムを実施し、特に鑑賞プログラムにおいては、動画記録、参加者へのアンケート、インタビューから得たフィードバックを分析し、特徴的な鑑賞アティチュードを抽出した。特に昨年も鑑賞プログラムを実施した保育園では、美術館などのアートのためにデザインされた空間ではない、保育園のホール内で対象者である幼児のふるまいに合わせた展示を行い、1～5歳の幼児がどのように作品と空間、また同時に鑑賞を行う他の幼児たちの中でふるまいとして見せるパフォーマンスを観察・記録した。また、彼らの保育に関わる保育士からの保育の視点からのフィードバックを収集した。そこから得られたデータの読み取りと分析の手法を引き続き検証中である。

白井は、拡張現実技術のひとつである「空中像」によってアバターを視覚的に提示した場合に、観察者がアバターに対してどのような生物性知覚を生じるかを実験心理学的手法によって検討した。3DCGモデルによって生成したアバターを空中像提示し、さらに専用のデバイスに対してリアルタイムにアバターがリアクションするように設定し、同デバイスを用いることで実験参加者がアバターとインタラクションを取れる状況を構築した。実験の参加者は4～9歳児(40名)と大学生(40名)であった。参加者は、(1)デバイスによるインタラクションを一切行わずにアバターを観察するだけのセッションに参加し、(2)その後デバイスによるアバターとのインタラクションを伴うセッションに参加した。また(2)のセッションへの参加の前後で、アバターの生物性についての質問項目(Okandaら, 2021)に回答した。その結果、子どもも大学生も、(2)のセッションの前後でアバターの生物性知覚得点が有意に上昇し、また全体的に子どものほうが大学生よりも、アバターの生物性について強く知覚していた。これらのことから、空中像による情報提示環境では、アバターとのインタラクションが生物性知覚を増強する要因となること、また、子どもは成人よりも強い生物性を知覚することが示唆された。

佐古は、①身体に根ざした学習の観点から対話実践における基準作成のための研究と②身体に根ざした学習システムの構築ならびに再構築としての愛、特にアガペーに関する研究を行った。①対話実践に関する研究においては、2022年度に、新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」(17H0 6346)で開発した映像分析アプリを利用した対話実践のアーカイブ化を進めるための方法論に関するワークショップを行い、2023年度においてはワークショップで得られた成果をもとに、アーカイブの作成作業を進めた。②身体に根ざした学習システムの構築ならびに再構築としての愛の研究については、2022年度に、①の内容とも深くかかわる「学習の方法としての「対話」という論文を執筆し、記号論の観点からの対話の分析を行いながら、比喩やオノマトペなども含む広い意味での対話が学習において重要な役割を果たすことを明らかにした。また、記号論の観点から旅における身体経験が学習に及ぼす影響について、「旅のマテリアリティと真正な経験に関する記号論的考察」問う論文を執筆した。2023年度は、②の内容について、特に記号論、パースにおけるアガペーとしての愛についての研究を進め、自己犠牲、他者への奉仕とされるアガペーが、実のところ、それに加えて、自己の成長を促すものであるということ「パースにおける成長の原理としてのアガペーと自己の変革」という形で発表し、その成果を論集の一章として執筆した。

日向は、一年目の研究は身体を問うてきた体育学における現象学的方法の展開を概括しつつ、体育学における身体性を読み解いてきた。その身体性を描き出しつつ、同時に身体性に回収しきれない教育学の観念的な側面として、大人—子ども関係という価値論を描き出した。そこから二年目の研究は非身体的なゲームといわれるビデオゲームに目を向けることで、「身体」と「子ども」の拡張的な観点の探究を目指した。ビデオゲームはしばしば身体性に欠けた間接体験として軽視されてきた。しかし「身体」が人間存在の根底的な条件であるという見立てから、むしろビデオゲーム体験にも身体性があるという仮説からビデオゲーム産業史を検討し、そこに家庭内で子どもがどのようにビデオゲームと共に生活するのかについての人類学的洞察があったことを明らかにした。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び  
 差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ) 及び、図書分担執筆

1. 河野哲也・長滝祥司・西川太智・田中彰吾・日向悠太, 「パフォーマンスの現象学」, 『現象学年報』第 39 号, 2023, pp. 49-56.
2. Lambert, Pablo Muruzabal & Kono, Tetsuya “Fighting for Sophia. The Intimate Relationship between Martial Arts and Philosophy as a Way of Life” *Tetsugaku*, Special Theme: Philosophical Practice, 2023, pp.124-142.
3. 佐古仁志, 学習の方法としての「対話」: パースにおける自己と共同体の成長, 叢書セミオトポス, 16 号, 2022, pp.136-152.
4. 佐古仁志, 旅のマテリアリティと真正な経験に関する記号論的考察 — 旅の偶然性がもたらす経験について —, 東京交通短期大学研究紀要, 28 号, 2023, pp.286-300.

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

5. Kono, Tetsuya “Bergson and Ecological Psychology”, *Bergson’s Scientific Metaphysics: Matter and Memory Today*. Ed. By Yasushi Hirai, London: Bloomsbury, 2023, pp.97-106(272).
6. Kono, Tetsuya “Le « corps-météo-monde »: le translucide et le tournant chez Merleau-Ponty. *Levinas et Merleau-Ponty: le corps et le monde*. Ouvrage issu d’un colloque de Cerisy. Ed. Corine Pelluchon et Yotetsu Tonaki. Paris: Hermann, 2023, pp.81-99(320).
7. Kono, Tetsuya “Kata and katachi in Japanese philosophy,” *L’ART COMME EXPERIENCE DU CORPS VIVANT: UN DIALOGUE ORIENT/OCCIDENT*. Edited by Christine Vial Kayser, Wilmington, Delaware: Vernon, Chapter I.4, 2024, pp.75-94, pp.453-474(794).
8. 河野哲也・田中彰吾, 東京大学出版会, 『アフォーダンス: そのルーツと最前線』2023, (230)。
9. 長滝祥司, 東京大学出版会, 「科学・身体・他者: 哲学的観点から見た関係性の認知科学の可能性」(第 7 章) 『認知科学講座 3 心と社会』所収, 2022, pp.207-241 (249)
10. 長滝祥司, 勁草書房, 「感情と身心因果: 伝統的物理主義に抗して」(第 1 章) 『「情動」論への招待: 感情と情動のフロンティア』所収, 2024, pp.13-35 (274)
11. 杉浦幸子, あいり出版, 「赤ちゃんとびじゅつかんプロジェクト 乳児のアート鑑賞をデザインする」石黒千晶・横地佐和子・岡田猛編著『触発するアート・コミュニケーション』2023, pp.121-122(278)。

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

12. 田中彰吾, 「パラスポーツを通じた他者理解と共生社会」日本財団パラスポーツサポートセンター・パラリンピック研究会第 42 回ワークショップ, 2023/8/23, パラスポーツサポートセンター。
13. 田中彰吾, 「触覚から身体と心を考える」, 東海大学 TQC 公開シンポジウム「身体の声に耳を傾けて — 学校・博物館におけるユニバーサルな学びの可能性」(篠原聰・栗川治・広瀬浩二郎・田中彰吾・原礼子・西本健吾・大島宏) 2023/12/16, 東海大学。
14. 杉浦幸子, 講演会「町田市小教研夏季実技研修会」, 2023/8/25, 町田市立国際版画美術館。
15. 杉浦幸子, 講演会「赤ちゃんから考える鑑賞」, 2023/9/3, アートギャラリーミヤウチ。
16. 白井述, 視覚発達研究の新しい形: リモートオンデマンド実験の試み. 2023 年度日本基礎心理学会第 1 回フォーラム, 2023/6/4, 専修大学神田キャンパス。
17. 白井述, 若年者群を対象とした行動研究実践: 選好注視法実験の遠隔実施の試み. 日本認知心理学会第 21 回大会「多様な発達段階を対象とした知覚・認知研究を考える」, 2023/6/30, オンライン。
18. 白井述 (2023) 光学的流動に基づく自己運動知覚の発達. 第 28 回日本バーチャルリアリティ学会大会, 2023/9/12, 東京たま未来メッセ。
19. 佐古仁志, 身体に根差した学習, 檜垣立哉教授大阪大学最終年度記念シンポジウム, 2023/3/3, 大阪大学。
20. 日向悠太, 菊地虹, 北村桜, 井谷信彦, 「教育実践をめぐる「遊び」概念の検討」, 教育思想史学会第 33 回大会, 2023/9/17, 同志社大学今出川キャンパス。